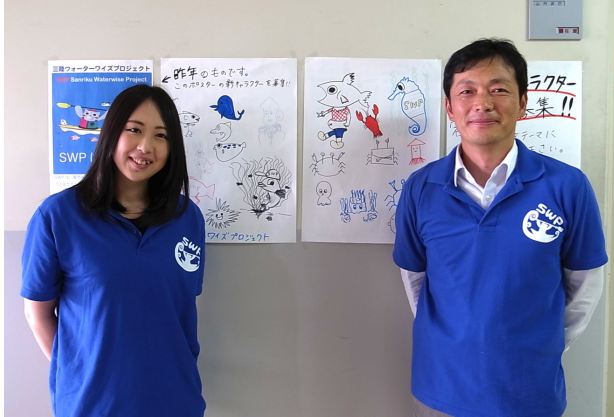


被災児童に対するウォーターワイズプログラム構築に関する調査・研究 ～子どもと海をつなげたい！三陸ウォーターワイズプログラム～

石巻専修大学 人間学部

山内 武巳 准教授

(2013年、2014年 調査・研究助成／東日本大震災復興支援特別助成)



左から 研究室学生の大藪桃子さん、山内武巳さん

●研究はどのようなきっかけで始められたのでしょうか？

私たちの大学がある宮城県石巻市には、太平洋に面し北上川下流域に位置する南三陸沿岸地域があります。東日本大震災以降、子どもたちの遊び場が減少し、特に海辺での活動ができずに海離れの状態が続いています。この地域の将来を担う子どもたちが三陸地域で海に関わらないでいることは、地域にとって大きな課題であると思いました。

もともと私自身、海と関わり海で遊んでいました。専門は運動生理学、環境生理学ですが、その中で海に関わるヒトの研究は、突き詰めると水難事故に関わってくるものです。それをいかに防ぐかを考えるにあたり、ニュージーランド発祥のウォーターワイズ、「水 (Water)」、「賢い (wise)」という海洋教育プログラムを知りました。水難事故を防波堤などのハード整備で防ぐのではなく、海辺活動に関する安全知識や意識を向上させるといったソフトの面で防いでいこうというものです。

以前、このウォーターワイズプログラムについて、大学生を対象にシーカヤックを用いて研究し、自己効力感を高めるという結果を報告しました。自己効力感とは、ある課題を上手く遂行できる見込みを意味していて、自己効力感が高まると特定の行動に対する意欲が高まると言われています。被災児童の海離れを防ぐには、このウォーターワイズプログラムが有効ではないかと考え、児童の自己効力感を高めて積極的に海に関われるよう支援する目的で「三陸ウォーターワイズプロジェクト」を立ち上げました。

●プログラムはどのように行うのでしょうか？

三陸ウォーターワイズプログラムは、海で「観る」、「聴

海洋資源が豊かな南三陸沿岸地域。東日本大震災では大きな被害を受けました。復興事業は進められているものの海辺の再生にはまだまだ時間がかかります。山内さんは、この地域で被災した子どもたちが、地域資源である海から離れることは、地域にとって大きな損失であると考え、子どもたちが海に親しみ関わることを支援するため、海洋教育プログラム「三陸ウォーターワイズプログラム」の実践と検証を重ねています。

なお、このプロジェクトは、2013,14年度にわたり、東日本大震災復興特別枠の調査・研究助成を行っています。



く、「感じる」の3要素から成っ

ており、主に南三陸の志津川自然学校や蛤浜など安全に海に触れられる場所で実施しています。

「海で観る」は、海の生き物に対する興味を持たせ南三陸の豊かな海洋資源と生態系の関係について理解を深めることを目的に行いました。砂浜に打ち上げられた漂着物を観察したり、自分専用の水族館をつくったり、漁船に乗せてもらったりして海の生き物を観察しました。

「海で聴く」は、波と風の関係について理解を深めることが目的です。波を起こす機械を使って波と津波の発生原理について学んだあと、実際にシーカヤックを使って海でうねりを体感してもらいました。

「海で感じる」では、海を肌で体感することを目的に、シーカヤックやシュノーケリングを行い実際に海に触れる機会をつくりました。

プログラムは子どもたちの夏休み期間にあわせて実施し、子どもたちへの広報は、南三陸、東松島、石巻、女川の教育委員会と町の広報を通して行いました。小学4～6年生を対象に定員は各回10名としましたが、5～20名の参加がありました。

「海で観る」、「海で聴く」、は1日開催、「海で感じる」は2泊3日の合宿形式で実施し、いずれも開始前と後に質問紙調査とインタビュー調査を行いました。

質問紙調査では、海辺活動に関する自己効力感と、日常生活活動に対する自己効力感の調査票を用意しました。そしてプログラム開始前後の結果を統計的に分析しました。インタビュー調査では、被災児童がプログラムに参加することで海とどのように関わるようになったかについて、グループインタビューもしくは個別インタビューを行い質的なデータ分析をしました。

●研究からどのようなことが分かりましたか？

ウォーターワイズプログラムは、児童の海に対する自己効力感の向上に繋がるということが分かりました。





ウォーターワイズプログラムの様子

インタビューからは、児童の海との関わりを示す4つのカテゴリー、「参加動機」、「海に対する価値づけ」、「海辺活動に対する価値づけ」、「継続的な関わりへの志向」が形成されました。カテゴリーはそれぞれ関連していて、児童はプログラム中、海や海辺活動に対して価値づけを行っています。それは彼らの参加動機によって異なります。また海に対する価値づけ、海辺活動に対する価値づけは相互に影響し合って行われます。こうした価値づけによって海に対する親和性が深まり、海辺活動のスキルをさらに向上させたいと思うことで、海と継続的に関わりたいと考えるようになります。ただ、海と継続的に関われるかどうかは、海辺活動に必要な道具や支援体制、児童本人や周囲の被災状況といった要因も関連してきます。

そのほかにも、いろいろな事がみえてきました。児童によって自己効力感の向上の幅に差がありましたが、それはこれまで海に触れる機会が多かったかどうか、カテゴリーにもあった参加動機の違いで自ら望んで参加したのか、親に言われて来たのかにも起因していたと考えられます。また、「海で感じる」プログラムでは、体力レベルの低い子は自己効力感が相対的に低くなってしまいました。そのため自己効力感を高めるためには、一人一人の体力や状況に合った道具を提供する事が必要であることが分りました。

●このプロジェクトをコミュニティスポーツの視点から見るとどのようなことが見えてきますか？

プログラムは大学関係者をはじめとする大人が5名、学生6名、漁協関係者5～6名と多様な関係者によって実施していることがコミュニティスポーツとしての特徴と考えます。プログラム当日はメンバー総出です。

海で「感じる」プログラムでは、漁港を使うため漁業関係者の協力が必須です。この話を持ち掛けたところ、震災で支援を受けたことから何かしら恩返しをしたいと快く協力してくれました。三陸の海ではウニやアワビなど海に潜る漁も盛んなので、シュノーケリングは下手をすると密漁に間違われてしまいます。

研究プロジェクトチームは、大学の臨床心理学、スポーツ教育学の専門家などで構成され、子どものメンタルケア、自己効力感の測定にあたっての質問紙づくりを共同

で行っています。また、学生たちが参加してくれることで子どもたちも打ち解け、何でも話してくれます。彼らの存在無しには成り立たなかったと思います。

地域でもカヤックを始める人たちが出てきました。これからも、海と関わりたい人が集まってプログラムを実践できれば良いと思っています。

●プログラムの浸透に向けて、今後どのように展開されますか？

2年目は、1年目の経験を踏まえてより自己効力感を高めるプログラムづくりを目指しています。一つには、これまで別の日に実施していた、海で「観る」、「聴く」、「感じる」の各プログラムを1日に集中して実施することを考えています。

また、児童個人に合った道具の選定や、水がきれいかどうかによっても海に対する印象が大きく異なるので、なるべく海がきれいな場所を選ぶことも重要です。

プログラムを実践する上で重要なのが、道具を揃えることです。現在はシーカヤックなど、道具を持っている施設に借りている状態ですが、施設の閉館状況によってプログラムの実施日程が左右されてしまいます。私たちが自由に使える道具があることで、定期的な開催が可能となります。学校の授業に組み入れたり、大学のカヌー部と組んだりすることもやっていきたいですね。

また、ウォーターワイズプログラムの内容をホームページで公開しているのですが、被災児童の海辺活動を支援するNPOやボランティア団体などにも、このプログラムを活用してもらいたいです。

<インタビューを終えて>

三陸地域は海ともにある。津波という海の脅威を経験した子どもたちに少しずつでも海に親しみを持ってもらいたい。そのような気持ちから始まった三陸ウォーターワイズプログラムは、海と関わるプログラムを実行し、検証を繰り返すことで、より洗練された内容を目指す実践的研究である。また、研究者、学生、子ども、漁業関係者など、多様な人々が関わっていることも特徴である。コミュニティスポーツの調査・研究においては、その成果を社会にいかにか還元できるか、より良い実践に繋げられるかも問われるが、三陸ウォーターワイズプログラムは、まさに多様な主体に成果を還元できるプログラムである。今後の展開の中にもあるように、海辺活動を支援する他団体とも協働することができればより広がりを持ち得るし、さらに他の海辺の地域にも転用できるプログラムとなるのではないだろうか。

(インタビュー・2015年5月11日(月) 於:石巻専修大学(宮城県石巻市)

文責:市民社会創造ファンド 山田絵美]

—研究者プロフィール—

山内 武巳 准教授

石巻専修大学 人間学部 准教授

中京大学体育学研究科博士課程修了。研究分野は、運動生理学、健康教育、生体適応。研究のテーマとして、特殊環境下における生体反応、運動の動作分析など。